

江刺しの稲を育てるために

本誌編集長

昆 吉則

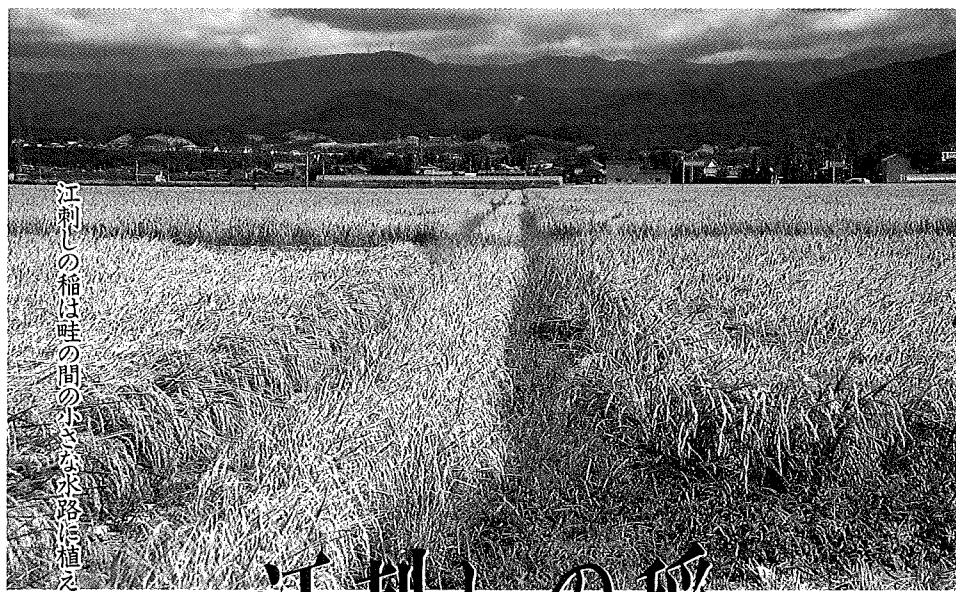
「江刺しの稲」というものを見た。昨年
の九月、石川県小松市の水田でのことだ。
江刺しの「江」は小川あるいは水路のこ
と、そして「刺し」は文字通り稲を「刺
す」田植えのことで、畦の外側にある用
排水路に田植えされた稲のことである。
それを見たのは一枚の区画が三a程の小
さな水田だった。約1m幅ほどの水路に
稲は二条に植えられており、畦側一条分
に自分の稲を植えるのだそうだ。

かつて、水路に植えた稲は年貢や小作
料の対象とはならず、取れた米は作った
人のものになったのだという。どこの農
村にもあったであろう「江刺しの稲」も、
今や水路がコンクリートになり、またそ
んな手間のかかる作業をする人もいなく
なり、いつの間にか目に触れることもな
くなってしまったのだろう。

こんな話を持ち出すのは雑学をひけら
かすためではない。「江刺しの稲」の姿が
畦の内側に植えられた稲と比べて余りに
も立派であったからなのだ。

植えてあったのは収穫一週間前のコシ
ヒカリだった。畦の内側の稲では分けつ
が二〇本前後、穂の粒数が一一〇粒くら
いなのに対して、江刺しの稲では分けつ
が三〇本以上あり、粒数も一四〇粒くら
いもあるのだ。すでに収穫の終わってい
る加賀ヒカリの株を引き抜いてみると、
付いてくる土の塊が断然大きく、根の勢
いの違いを感じる。

江刺しの稲は、気がつけば草を取るく
らいで、水路では水管理のしようもない。
肥料や農薬は流れてくるだけ、もちろん
耕起もしない。移植も、田植え時では水
が深すぎるので一旦水田内に仮植して大
きくなってから植え直すのだそうだ。自



江刺しの稲は畦の間の小さな水路に植えてあった

江刺しの稲 第一回

いるかもしれないが、
江刺しの稲と比較し
たのはその畦際の稲
なのだ。それでこの
差なのである。この
違いを何と説明すべ
きなのだろう。

いったらみれば放つ
たらかしにされ、言
葉は悪いが、継子扱
いにされていた稲が
手間をかけお金をか
けて育てたはずの稲
よりもはるかに立派
に育っているのだ。

農業が土や作物と
いう「自然」の持つ
潜在的生産力を人間
の都合に合わせて引
き出すための方法で
あるのだとしたら、
そこで行われている
「技術」や「経営」
とは、何と不確かだ
頼り甲斐のないもの
なのであろうか。む

しろ、良いと思っ
ておける可能性を
押し殺しているこ
とすらあるのでは
ないか。

僕は無農薬農業論者でも有機農業論者
でもない。しかし、土を耕すつもりが田
を踏み固め、有機物の還元がないからこ
そ地力が衰え、その結果多肥に傾き、作

物が弱くなるからますます農薬・除草剤
への依存度を高め、そして土はますます
生命性を乏しくしていく。またいつしか
省力が手抜きに変質していく。そしてそ
の悪循環が経営を、農業を減ぼしてい
くことにつながるのではないか。

それは、自然の摂理との整合性を考慮
に入れた「循環の農法」を無視し、ただ
現代的技術手段を無疑問に取り込んで行
く我われの技術観、あるいは目先の儲け
や手間が減ることばかりに気を取られそ
の過程で失われていくもの大きさに気
づかないでいる功利主義的経営観の中
にその原因があるような気がする。

人は「経営の永続性」を語り、またそれ
を望む。しかし、人というものは多分、
自覚的にそれを問わぬ限り、いつの間
にかその落とし穴に落ち込んでいく存在
なのであろう。

もし僕たちが経営者だとい
うのであれば、この江刺しの稲を水田の内側に育て
ること——その作柄だけでなく経営の中
身においても——を自らに問いかける責
任を持っているのではないか。

今日の作柄や利益の多少に一喜一憂す
るのはもうやめにしよう。少なくとも、
あの江刺しの稲のようにもっと大きな可
能性が我われには与えられているからだ。

次号より、稲作に限らず、いわばこの
江刺しの稲を畦の内側に作る人々、また
それに近づく技術や経営への取り組み
を、小さな自営業者の自らへの練習問題
として考え、報告して行きたい。